

# 「長崎くんち」の龍踊で 采配を振るう

フジカ代表取締役  
筑後町「龍踊」総監督

## 平 浩介

### 筑後町の龍踊は 三頭が一斉に舞う

長崎の秋といえば諏訪神社の大祭「長崎くんち」。今年も十月七、八、九日の三日間、長崎の街中を熱狂の渦に巻き込みます。中でも龍が生きているように宙を舞う勇壮な「龍踊」は花形ともいえる存在です。今年の踊町である筑後町の龍踊。その総監督を担う平浩介さんは、経済学部卒の卒業生でもあります。「総監督とは、つまり現場の責任者ですね。全体の運営をつかさどるのは『町方』と呼ばれる役員さんたちですが、その下で出し物を演じる人たちを統括する役割を担っています。龍踊を

奉納するのは、籠町、諏訪町、五島町と我が筑後町の四つです。筑後町の一番の特徴は、なんといっても巴踊りでしょう。巴とは三つの渦。つまり三頭の龍が一度に舞うもので、昭和四十八年に筑後町が初登場したときからの最大の見どころでもあります。決して広いとはいえない諏訪神社の踊場で三頭が同時に踊り、ぶつからないようにそれぞれが宝珠衆（玉持ち）のリードに合わせて動きます。難易度は高いのですが、今年もお見せする予定です」。

毎年何かしら新趣向が取り入れられて「新しもん好き」の長崎人ごころをくすぐります。「今年はどうな趣向を凝らそうか」それが、平さんの目下の思案のしどころでもあるのです。それにしても、龍を操る龍衆だけでも六十五人。十月の本番まで四カ月以上稽古するのですから、総監督の重責はいかばかりでしょう。

子どものころに囃子方で出演した人です。私自身がくんちにとっぷり漬かったのは三十歳を過ぎてからですが、やはりくんちには、若いときから参加して独特の世界観を味わってほしいですね。その経験が後々生きてきます。まずは自由な時間のある大学時代にチャレンジしてほしい」。

平さんは、経済学部でどんな学生だったのでしょうか。「恥ずかしながら勉強はほとんどしていませんでした。学んだのは先輩への礼儀や、お酒のつぎ方くらいです。それでもパブル真っ盛りで、就職活動も、今の学生には申し訳ないくらい楽な売り手市場でした。東京の会社の面接でたっぷり交通費をもらい、ちゃっかり後楽園でプロレス観戦までして。大手の金融機関に就職した友人も大勢いましたが、逆にいえば大量採用は景気が悪くなるとリストラの対

象になりやすい。いいことばかりじゃないですよ。また、同期には地元に残り家業を継いだ者もいます。私も東京での食品卸会社勤務を経て、長崎に戻り、

二年前に父親が創業した会社の跡を継いで代表を務めています。包装資材の会社で、カステラ屋さんとの取引も多いそうですね。「一般のパッケージのほか、カ

ステラの上のこげ茶色の焼き面が剥がれにくい特殊な紙も扱っています。カステラをお客さんにお出しするときに焼き面がぼろぼろだと見た目が悪いので、

大事な紙なんです。ニッチなマーケットでしょう？ だから大手は手を出さない。全国各地のカステラや菓子のメーカーにも卸しています」。

観光産業に近い業種ということもあり、長崎の観光やまちづくりに興味を持ち、まち歩きの博覧会「長崎さるく博'06」の市民プロデューサーを務め、名物ガイドとして活躍。その後も次々と個性的なまち歩き企画を立案して評判を呼びました。龍踊の総監督の役柄が回ってきたのも、一連の活動の影響があるのではないかと。

「いろいろな活動はバラバラなようにしていて、全部つながっていません。会社でもくんちでもまちづくりの活動でも、相手が目上や組織であっても、これはおかしいと思えば食い下がるタイプですね」。

「長崎くんち塾」という市民サークルにも入って歴史やしきたりを学びながら、くんち仲間との交流にも熱心な平さん。「くんちは現場で学ぶことも多いから」と、出番以外の年には他の町の手伝いにも積極的に出かれます。そんなときには自分より若い世代にも声を掛けるのだとか。こうした地道な活動の積み重ねがあつてこそ、くんちの晴れ舞台でもあります。

地域の伝統文化の継承は、若い世代の存在が欠かせません。先人の思いを受け継ぐ平さんのバトンもまた、次の世代に手渡されていくでしょう。



たいらこうすけ  
長崎生まれ筑後町育ち。1986年長崎大学経済学部卒業。食品卸会社のリョーシヨク勤務を経て、株式会社フジカ入社。2004年より長崎さるく博'06市民プロデューサーを務める。「長崎はローマだった」コースなどを制作し、自らもガイドとして活躍。その後数々のまち歩き企画を立案し、人気を博す。2014年フジカ代表取締役役に就任。2009年に続いて今年も筑後町龍踊の総監督を務める。

